

日本神話、アイヌ神話、 出雲神話と『もののけ姫』

河原修一



『古事記』『日本書紀』によれば、ア
メノミナカヌシ（高天原の主神）に
命じられたイザナキ（男神）とイザナ
ミ（女神）が、天の浮橋（神々が往き来する
をつなぐもの）に立つて、まだ大地とも海原と
も形をなさない地上世界を天の沼矛で
かき回すと、矛の先のしずくが垂れ落
ちてオノゴロ島（おのすからこり）ができる。
二神はオノゴロ島に降り立つて、天の
御柱を建てる。二神は天の御柱をめ
ぐつて結ばれ、たくさんの国々（島々）
や神々を生む。精霊としての神々は、
国々（島々）を海、山、川、風、木、獣、
人などで彩り、葦原中国と呼ばれる

地上世界ができる。類似する天地創造
神話は、太平洋をめぐる各地の各先住
民（ニューギニア先住民など）の神話にも伝
わっている。



アイヌ神話『カムイ・ユカラ』によ
れば、まだ地上には人間も植物も何一
つ出来上がっていないかった大昔、天上
界の神々の国では重い位の神様たちが
毎日のように集まって、下界に有能な
神々をおくつて国土を造り、そこに動
物や植物なども造つて、平和な大地に

しようという相談の会議を続けてい
た。そして、国造りの神モシリ・カラ・
カムイ（山、平野、川の、お供に犬の神レ
エブ・カムイと鷲、梟の神、ついで造
化の女神イカツ・カラ・カムイ（草、
花を）が下界に下つたとされる。



『出雲国風土記』によれば、ヤツカ
ミスオミツノが初めに造らせた出雲国
は幅狭く小さいので、佐比売山（三瓶
山）を杭として綱を掛け、新羅国の岬
に鋤を突き刺し、引きちぎつて、杵築

の岬（日ノ御碕）としたり、火神岳（鳥取県の大山）を杭として綱を掛け、越の都の岬（石川県能登半島）を同様に引張って、三種の埼（美保関）としたりして、国土を補っている。



『古事記』『日本書紀』では、イザナミは岩土の神、海の神、川の神、風の神、木の神、山の神、野の神、天の鳥船（神々が天地を往き来するための乗り物）の神、食べ物の神などを生んだ後、火の神を生んだとき、火傷で地上世界を去り、根の国または黄泉の国と呼ばれる地下世界に赴く。イザナミの遺骸は、出雲国と伯伎国の境の比婆の山（鳥根県境に近い広島県）に葬られる。

イザナキは亡き妻を偲んで、黄泉の国を訪れるが、正体を見てはいけないという禁忌を破って、イザナミに逐われる。イザナキは、葦原中国と黄泉の国の境の黄泉平坂（出雲国揖屋）を千引石で塞ぎ、生者の国と死者の国とを隔てる。この絶縁により、人間に生死ができる。

イザナキの禊ぎにより、日神アマテラス、月神ツクヨミ、嵐・雷の神スサノオが生まれる。それから、高天原でのスサノオの乱暴狼藉、アマテラスの

天石屋戸への引籠りと再登場、高天原からのスサノオの追放、出雲国（鳥根県・田町の旧島上村から妻伊川を下る）でのスサノオのオロチ退治と稲田姫との結婚、出雲国のオオクニヌシの活躍と国譲り、アマテラスの孫ホノニニギの高千穂の峰への降臨、海幸彦と山幸彦の確執、神武東征、ヤマトタケルの活躍と悲運……と、日本神話のハイライトが続く。



ところで、古代日本人の宇宙観は、〈高天原―葦原中国―根の国〉という神人を含む垂直構造（三層構造）に、常世の国（沖繩のニライカナイ、中）という水平構造が加わって、現実世界と霊的世界を含んでいる（葦原中国以外は）。北アメリカ先住民のホーピ族の神話も、三層構造の垂直構造の宇宙観を示している。一万二千年前に始まる縄文時代に先立って、氷河期にベーリング海峡は陸続きとなり、シベリアの狩猟民族（モンゴロイド）は獲物を追って、北アメリカ、南アメリカ大陸に渡ったとされている。

神々は、高天原と葦原中国、葦原中国と根の国、葦原中国と常世の国を往き来する。しかし、人間には、神々も、天の浮橋も、天の鳥船も、知覚されな

い。

人間には知覚されない神々の存在形態は、隠り身である。人間に知覚される神々の存在形態は、現し身であるが、人や獣という仮の姿となる化身である。



イザナミは、地上世界で活動するときには命と呼ばれるが、黄泉の国では大御神と呼ばれる。スサノオもオロチを退治し稲田姫と結婚して出雲国を治めるときは命と呼ばれるが、葦

原中国を去って根の国に赴いてからは大御神と呼ばれる。アマテラスはずっと高天原にいて、大御神と呼ばれる。つまり、「みこと」は語源的には御言であり命令の意味にもなるが、言葉を通して人間世界で命を得て活動（活躍）しているときの神々や英雄の呼称である。

三輪山の神は、美しい若い男性の姿で現れ、毎夜、人間の女性のもとを訪れて交わる。アイヌ・縄文人の先住する東国を征伐しようとするヤマトタケルに対して、足柄山の坂の神は白い鹿となつて現れ、伊吹山の山の神は大きな白い猪となつて現れ、抵抗する。ヤマトタケルは、この大猪との争いによる傷がもとで息絶え、その魂は八尋白智鳥（両翼上ノ白鳥）となつて高く天翔ける。

アイヌ神話『カムイ・ユカラ』では、石狩峠を支配する熊の神キムン・カムイは、禁忌を破って、神々が剣を造るために鉄を打ち叩くウカジ（鍛冶）の音に誘われて現場を見て命を落とし、三年間白骨のまま神の国に戻れないが、通りがかった守護神シカマ・カムイ達に歌や踊りで供養されて、霊界に帰る。人間（アイヌ）達と共に暮す天上の神の子アイヌ・ラツ・クルは、平和な人間の村（アイヌ・コタン）を襲



う（普通の鹿の二倍の大きさの）大鹿（荒神の化身）を矢で射殺し、鹿神の頭を村に運ぶが、イナウ（木幣）で祀り、その靈魂を天空に帰す。

日本神話（弥生神話が被さる前の縄文神話）もアイヌ神話もアメリカ先住民の神話も、神霊や精霊によって自然が造られたとされ、動物・植物を人間に贈ってくれる神々に感謝し、取り尽すことをせず、幣ぬさで祀って再び霊界に送り帰す。自然界の土地も動植物も神々のものであり、私有財産という観念はなかったため、後述者に侵略されることとなる。



宮沢賢治（岩手県花巻市出身）の童話『土神と



きつね』では、土神はアイヌ・縄文的な土着の神であり、原初的な集合的無意識による煩惱の象徴ともなり、きつねは弥生文化さらには西洋文明を体現し、合理的な考え方に伴う煩惱の象徴ともなる。土神ときつねが恋敵として争う樺かほの木は、アイヌ神話『カムイ・ユカラ』に登場するチキサニ（春楡）の木のイメージと響き合う。チキサニの木は、月夜には若い美しい姫神の姿に変わる。天上界の荒神の雷神シ・カンナ・カムイは下界に下ってチキサニ姫に一目惚れし、落雷し合体して、チキサニ姫は六日六晩燃えさかる。火の渦巻きから這い出してきた赤ちゃん（アイヌ・ラツ・クル）を造化の女神イカツ・カラ・カムイが走り寄って抱き上げ、太陽神の妹イレシユ・サポ姫に育てさせる。

賢治の童話『風の又三郎』では、東北地方の民話に出てくる風の三郎、さらにはアイヌ・縄文的な風の神という原初的な心象に、新しい西洋の文明や思想を運ぶ風というイメージが重なり合っている。



やまとことば（和語）としての「もの」は、概念が広く、物（対象）であ

り、者（主体）であり、鬼（靈的存在）でもある。目に見えないものを含む「ばけもの」「もののけ」「ものさびしい」というときの「もの」は、目に見えない霊的存在を意味する。「もののけ」とは、目に見えない霊的存在の気配を意味する。

宮崎駿監督のアニメ『もののけ姫』では、室町時代中頃、アイヌと近いとされる東北地方（モデルは青森県と秋田県の白神山地）のエミシの隠れ住む村を大猪のタタリ神が襲い、エミシの族長の血筋をひく若者アシタカ（古事記に登場する神武天皇の東征に抵抗したナカフスネヒコを連想させる）が弓で射殺す。右腕に死の呪いの痣を受けたアシタカは巫女ヒイの勧めで村を出て西に向かい、奥出雲の鹿神の森で無数の精霊コダマ（木霊）、年経て霊力を得た巨大な山犬（狼）モロとその養女サン（かつて人身御供として山犬に呼ばれていた人間の幼女で今はものけ姫と）、鹿神、猪神の乙事主と出会う。

鹿神の森（モデルは現在の島根県奥出雲町旧横田町または雲南市旧吉田村）の一角は、エボシ御前（もとは鳥帽子を被って舞戸内海海賊の娘、子山の名を連想させる）が被差別部落民（もとは大和朝廷に征服され、れた縄文先住民や山人族）、ハンセン病患者などを率いてタタラ（砂鉄から鉄を精錬する）を経営する自治共同体または要塞として、開発されている。タタラは、

古代の北東アジア一帯に見られる鉄の精錬方法である。エボシは鹿神の森を

守る勢力（モロ、サン、乙事主）や管領アサノの武士団と戦いながら、鹿神を成敗する天皇の勅書を携えるジコ坊（朝廷の秘密組織の師匠連の頭目、鹿神退治のために石火矢衆、唐傘連、地走りエボシに貸し与えている）と組んで、鹿神の首を狙っている。



鹿神は生死を司る自然霊で、夜はデイダラボッチ（東北地方の民話に登場する森の妖怪、大太郎坊主の詛り）の姿となる（鹿神は新しい生命の息吹き、デイダラボッチは破壊に至る死を司り、生死が表裏一体である）。エボシが石火矢で撃ち落した鹿神の首をアシタカは荒れ狂うデイダラボッチに返すが、夜明けの光と共にデイダラボッチは湖に倒れ込む。太古からの森は消え、明るい里山が現れる。無数のコダマは姿を消すが、一体だけ残る。アシタカは許嫁いいなむめの力に貫つた黒曜石の玉の小刀をサンに渡し、エミシの村には戻らず、エボシのタタラで暮らすことにする。



大和朝廷が律令体制を確立しようとする七二二年に国内向けに『古事記』、七二〇年に中国向けに『日本書紀』が編纂される。国史編纂と並んで、地方史編述の中央官命が七二三年に下され、各地で『風土記』が編纂され始める。

弥生時代に日本列島に後れて渡来した(大陸または半島の貴族が亡命した)と考えられる天皇家(日本神話では日向(ひむか)の孫降臨)に対する先住民は、アイヌ(北日本)、エミシ(東日本)、土蜘蛛(関東・西日本、弥生人による蔑称)、国栖(畿内大和)、越人(北陸)、出雲人(山陰)、吉備人(山陽)、隼人(南九州)、熊襲(南九州)、奄美人(南西諸島、沖縄人(南西諸島)など、様々な民族から成る縄文人と考えられるが、越人、出雲人、吉備人などは天皇家よりも古い弥生人が被さっているとも考えられる。

原形を伝えていると考えられる『出雲国風土記』では、ヤツカミズオミツノが「八雲立つ」と仰ったとあり、また、オオクニヌシが「越の八口」(ヤマタノオロチ)(越後国に八ツ口と)を退治して「八雲立つ出雲の国」は自分が平定して「青垣山を廻らし」と仰ったとあるが、大和朝廷が中心となつて編纂した『古事記』『日本書紀』では、スサノオがヤマタノオロチを退治して「八雲立つ出雲八重垣」と歌ったとある。次々に後からやって来た部族が、先住する部族の伝説・神話を自分達の神話に取り込んで行ったとも考えられる。とすれば、ヤツカミズオミツノが出雲国に先住した縄文人の信仰する土

着の神または開拓者であり、オオクニヌシが大陸・半島から渡来した弥生人の信仰する神または開拓者(征服者)であり、スサノオは天皇家の信仰する神または開拓者(征服者)であるのかもしれない。また、オオクニヌシまたはスサノオが越の八口またはヤマタノオロチを退治し、オオクニヌシが越の沼河姫(越後国に沼河と)のもとに求婚に出かけるといふ神話から、古代には出雲国と越国との間に交流があり、越国は出雲国の属国に近かつたとも考えられる。なお、古墳の埴輪や副葬品のやりとりがあつたと考えられる出雲国と吉備国は友好的で対等の関係であつたと考えられる。



ヤマタノオロチの意味について諸説(約二十)あるなかに、ロシアの沿海州にいたオロチ族を指すという説がある。また、三韓(高句麗、新羅、百濟)時代の朝鮮半島に、現在の金海・釜山付近に伽耶という小国があり、稲作と砂鉄からの精錬が行われ、出雲国との地名の類似も見られると言われる。出雲人が龍蛇をトーテムとするところから、その出自をシルクロード系とし、伽耶の国は民族移動の中継点とする考

え方もある。縄文時代から古墳時代まで千年間にわたつて、次々に大陸・半島から日本列島に民族移動があつたとされるが、越人、出雲人、天皇家という順に渡来してきたとも考えられる。

大和朝廷は平安時代から東北地方の先住民のエミシ(蝦夷)の叛乱(八世紀の戦い、十一世紀安倍一族の戦い、十二世紀奥州藤原氏の戦いなど)に対する討伐を試み、征夷大將軍を遣わした(その呼称は江戸時代まで)。幕末から北海道開発と称して、アイヌの村々を侵略した。明治三十二年には北海道旧土民保護法を制定して、アイヌの主食である熊・鹿・鮭の捕獲を禁じた(この悪法は平成九年まで続く)。

日本神話、アイヌ神話、出雲神話と『もののけ姫』には、古代人の精霊信仰(アニミズム)だけでなく、日本列島における生々しい歴史の一端も垣間見えるのである。

(かわはら・しゅういち/日本語学)

——参考文献——

- 小林芳規ほか『古事記』日本思想大系(岩波書店)
- 大野晋ほか『日本書紀』日本古典文学大系(岩波書店)
- 秋本吉郎『風土記』日本古典文学大系(岩波書店)



- 山本多助『カムイ・ユーカラ』平凡社ライブラリー(一九九三)
- 萱野茂『アイヌ歳時記』平凡社新書(二〇〇〇)
- 久慈力『もののけ姫』の秘密』批評社(一九九八)
- 宮沢賢治『土神ときつね』『風の又三郎』宮沢賢治全集(ちくま文庫)
- 大林太良『世界の神話——万物の起源を読む』NHKブックス(一九七六)